

Savina の Bè (倍) 語辞典 (海南島の言語)

西田 龍 雄

1. タイ語系の言語の比較研究は、近来対象の範囲が次第に拡張され、狭義のタイ諸語の比較のみならず、より広い領域でこの系統の言葉を取り上げるようになってきた¹⁾。中国科学院少数民族研究所の成果の一つである Chuang (僮) 語の研究、水語侗語の研究、李方桂教授の Mak-Sui-T'eng (莫, 水, 羊黄) 語²⁾などの資料は、比較研究をその方向に急速に進めた。Haudricourt による周辺の言語の紹介も³⁾、また新しい開拓面の存在を指摘し、海南島の黎語も、この新しい動向の一環として大きい役割をもつようになってきた。黎語の存在は、かなり早くから、知られていたが⁴⁾、これまでのもつともまとまつた代表的な資料としては、François Marie Savina 神父 (1876-1941) の *Lexique Day-Français (BEFEO 31. 1931)* があつた。タイ系言語の研究に多くの資料を提供した A. Savina は⁵⁾、海南島にも4年間滞在して、黎語の資料を集めた。主に島の南の地域、俸 (Ha) 方言を対象にしたが、島の中央部の山嶽地域で杞 (Ki) 方言をもしばらく調査している。上述の *Lexique Day-Français* はその俸方言の語彙であるが、その資料に、*accompagné d'un petit lexique français-Day et d'un tableau des différences dialectales* の副題をつけたように、Ha 方言と Ki 方言の比較語彙 156 語を提供している⁶⁾。Savina が調査した海南島の言語資料は、この黎語の Ha 方言と Ki 方言のみではなかつた。École Française d'Extrême Orient の書庫に保管されている Savina の遺稿の中に、*Dictionnaire Français-Bè* の題をつけた原稿が発見された。Savina が、この言葉を調査したときには、Bè 語は漢語の方言と bilingual な人々約 10 万から 20 万人程度によつて話されているのみであつたという。彼らはすべて農夫であり、Ong Bè と自称した。Savina は、Ong-Bè 語は Day 語とは違っているが、やはりタイ語系に属する言葉であると考えた。この Savina の原稿を発見した A. G. Haudricourt がまとまつた体裁に編集したのが本書である。A. G. Haudricourt は、音声学者として、また東南アジア諸言語の研究者としてよく知られている。

この Bè 語の資料は、東南アジア地域に新たに一つの言葉を加えるとともに、タイ系言語の比較研究の領域を一步広げる役割を果たした。Bè 語はおそらく、今では滅亡してしまつたかあるいは滅亡しつつあるに違いない。

2. 普通に考えて、この Bè 語の資料の提供には、i) 海南島の言語の中での Bè 語の位置、ii) Bè 語の言語体系とくに音素体系の記述、iii) Bè 語と同系統

の言語との系統関係について、論じられることを期待する。本書には、海南島の言語についての説明にとぼしく、また Bê 語の音素体系は、明瞭には記述されていない。もつばら Bê 語の語彙を提供するところに主眼があり、その形式と同系言語との対応関係の追求に主体がおかれている。編集者 Haudricourt の意図は、やはりタイ語系言語の比較の中で、この Bê 語形のもつ価値を確めるところにあつたと思われる。しかし、これは本書の資料が Savina の遺稿であり、Bê 語を今の段階で再び検討することが極めて困難である以上、止むを得ないであろう。

本書には、目次がないが、その構成は、つぎの4つの部門からなつている。
F. M. Savina et son œuvre (pp. 5-6)

I. La préface de Savina avec commentaire (pp. 7-10)

II. Le Dictionnaire Bê-Français (pp. 11-137)

I. Classement des monosyllabes par rimes (pp. 15-137)

III. Le traitement des initiales et des tons (pp. 138-146)

IV. Le vocabulaire Bê (pp. 147-148)

このあとに Index 9種がつけられている。(II章はIのみでII以下はない。あるいはこのIは印刷上の誤りで、母音Iの意味であるかもわからない)。

3. Haudricourt は Savina の資料をそのまま書物にしなかつた。もともとの Français-Bê を Bê-Français の体裁に並べかえ、さらにそれを韻母を基準に排列した。それが、本書の中核をなす第II章である。Haudricourt は、その排列がえにあつて、つぎのような操作をしている。

Savina の表記に指示された弁別をその通りに保存しながら、その弁別が正当でないと考えられる場合には、それらを組み合わせた。換言すると、Haudricourt は Savina が Français-Bê 辞典を意図した資料を並べかえることによつて出てくる表記上の不統一を改訂しようとしたのである。その表記上の不統一は、ことに母音において、規則性をもつて、あらわれてくることが多い。つぎにあげる Bê 語の母音の中でハイフオンで結んだのがそれである。

単純母音	i	iê-ê	e	èa
	u'	u'o'-o'	a	
	u	uô-ô	o	ôa

-i に終る母音結合

êi

u'i o'i-u'o'i ai

ui ôi oi

ôai-uai

-u, -o に終る母音結合

iu êu-iêu êô eo êao-iao

iau-êau âu-au ao

Savina はベトナムの國語の表記法を採用しているが、Haudricourt は子音に關してはそれを改めて、c- q- k- を k- に、d- を z- に、đ- を d- に、x- を s-

にした。Bê 語の子音はつぎの体系をもっている。

b	p'	m	
d	t	n	l
ts=ch	s	z	
k	k'=kh	ng	h

(attaque vocalique)

b, d に対して g がいないところは、タイ系言語としての性格と一致するが、t に対する th がなく、ts に対する tsh がいないなど、かなり不均衡な体系を示している⁷⁾。そして、実際にはこのほかに ng' が使われている (p. 21, 58, 117)。しかし ng- と ng'- が弁別されたのかどうかは明らかではない。

Bê 語には5声か弁別される。これはもとの表記にしたがうが、同じ単語や表現で違った声調表記があてられている場合には、それらを同じパラグラフにまとめたという。Bê 語の5声はつぎのようである。

1. le ton plan (a) 平板型
2. le ton descendant (à) 下降型
3. le ton montant (á) 上昇型
4. le ton grave bas (a) 鈍低型
5. le ton grave montant (â) 鈍昇型

(第5声はいわゆる入声調、-k, -p, -t 音節のみに出る⁸⁾) 実際には、このほかに ton interrogatif (â) とよぶ型が随所にあらわれているし、あとの ton の来源を論じるところでもこの声調が出てくる (p. 146)。したがって、この資料による限り、Bê には6声あるとするのが正しい。

第Ⅱ章韻類辞典では、単語は、同じ主核母音をもつ -zero, -m, -n, -ng, -p, -t, -k の順に、そして子音は初頭音が bilabial, apico-dentales, palatales, vélares, laryngales の順に並べられる。

4. この書物の特徴は、かなりの Bê 語の単語に漢語とタイ語の対応形(同源形)がつけられている点であろう。中古漢語は Karlgren よりも、E. G. Pulleyblank の方が妥当であるとして、その再構成音をつける⁹⁾。この漢語は R. A. D. Forrest が校閲したといっているが、あとで批判するように、Savina の *Dict. étymologique Français-Nang-chinois* (Hong Kong 1924) のような信頼性は認められない。現代漢語からの借用語には Hoclo (福老) 語形をあげているが、これは Savina がもともとつけていたものである。タイ系言語としては、共通タイ語(略記 T), Tchouang-Dioi (C-D), または Li (L) の対応形式をあてている。

具体的に、第Ⅱ章の内容を若干例示すると、つぎのようになる。(p. 17)

bê village……
 bê comparer, bê dêi……<H. bi <C. pei *⁴pií 比

bê bê hẽo àù, une jupe
 bê̂ (feuille)…… =T. ʔbəw ㄅㄨ
 bê̂ oncle (paternel), viel homme <H. bẽ *pək 伯

この中, bê 語とタイ系言語の対応関係が, はつきりしている単語を, 各韻類のあとで取り上げて比較表にし, つぎの9種類の言語形を対照する。1. Bê, 2. Thai, 3. Tchouang, 4. Sek, 5. Mak, 6. Sui, 7. Tong, 8. Li (s), 9. Li (w-l)。
 2. Thai は Haudricourt の設定する共通タイ語形, 3. Tchouang は Esquirol et Williate; *Dict. Dïoi-Français* と李方桂武鳴土語, 僮漢詞典の3種の資料から再構成した形, 4. Sek の欄には編集者が1960年に Thakhek で蒐集した形(ただし声調表記に欠ける), 5. Mak, 6. Sui は李方桂の語形により¹⁰⁾, 7. Tong は, 侗漢詞典(北京 1959)に, 8. Li (s) は上掲『Savina の Lexique Day-Français に, 9. Li (w-l) は王力「海南島白沙黎語初探」『嶺南學報』1951の語彙を使っている。上にあげた ê 母音には, つぎの例があげられる (p. 21)。

Bê Thai Tchouang Sek Mak Sui Tong Li (s) Li (w-l)
 feuille ʔbẽ̂ ʔbəw ʔbəw ʔbə ʔva' ʔwa' pa' bəw pəw
 main mẽ̂ mɯ mɯ>məw mɯ mi mya mia məw məw
 après-demain zẽ̂ rɯ rɯ>rəw rɯ (na……na) ñəw ñəw

ê 母音の対応例は全部で6例あげるが, “dans”, “près”, “grand” はここでは省略する。この ê 母音に関する限り, Bê 語は Thai, Chuang, Li 語にかなり規則的に対応する。しかし, その関係は, どの韻母についても明瞭であるわけではない。Sek, Mak, Sui, Tong と Bê の間には, はつきりとした対応関係はいつも成立しない。もし, 比較表から, この9種の言葉の韻母の対応法則を書き出すならば, あまりに不規則な形が多く含まれているために, どれを規則形と認めるかの点で大いにとまどってしまう。いまここで韻母の対応法則をすべてあげる煩雑さをさけたが, 総計70以上の関係を設定できる。たとえば, (Mak. Sui. Tong は略する)。

	Bê	Thai	Tcho.	Sek	Li (s)	Li (w-l)
1. ê	əw, w	əw, w	ə, w	əw	əw	əw
2. e	i	i	i	ei	e	(1例)
3. êa	a, u	a, w	a, uo	a	a	
4. u'	et	at	ek	ap	ap	(1例)

対応形の選択の仕方が必ずしも妥当ではない例もある。たとえば

	Bê	Thai	Tcho.	Sek	Li(s)	Li(w-l)
“dent”	tón	(khiew)	van	x	phen	fan̄

このタイ語形は, fan とすべきであろう。

“fair”	hũk	(dam)	dwk	x	vu'	x
--------	-----	-------	-----	---	-----	---

このタイ語形は、シヤン系言語に分布する het (Shan hə1: Ahom hit: khamti het) に替えるべきであろう。

“pied” kōk (tin tin tin) khōk khok

タイ語形 tin の替りに qha をあげるべきであろう。

各韻類の末尾につけられた単語比較表には似た語形が対照されているのみで、果して、それらが同源形式であるか否かを決定できない例も少なくない。そのような例では対応の規則性は当然極めてあいまいになる。

Bê 語は、本書に提出された例にもとづく限り、ほかの黎語よりもむしろタイ語にかなり近い印象をあてる。Bê 語の系統は、その点に焦点をしぼつて証明すべきであつた。換言すると、Savina の遺稿という制限された資料から、Bê 語についての記述をこれ以上に進めることができないならば、提供された Bê 語形をできるだけ活用し、Bê 語と Thai 語、Thai 語と Li 語、Li 語と Bê 語、この三者の間の同源形式の分布関係をより徹底して考察すべきである。その方向への研究は、ここに提供されている Mak Sui Tong 語を含めた語形の対照よりもより重要な仕事であるに違いない。

5. 本書の中には、同じ一つの Bê 語の単語形式が、語源的にタイ語にも対応し、漢語にもあたる場合がある。たとえば “cinq” nga は、タイ語 ha² にも対応するし、五 nou にもあたる。“fourmi” mō は、タイ語の mod にも、漢語の蠅 ma にもあたる。この例からみても、Bê 語形はタイ語形の方により類似していて、漢語形は明らかにより遡つた共通段階における親縁性を示しているように思える。本書では Bê 語と漢語の対応関係を法則的に取り扱っていないが、この両者の対応のさせ方にいくつかの問題が起つてくる。

p. 49 tsói mo comme vous voudrez *zwie 随
sói mo comme vous voudrez *zwie 随

p. 98 lèng, nòm lèng eau froide <*lián 涼

p. 101 lêäng, bôn lêäng vent froid <*lián 涼

この2例は Bê 語の tsói-mo と sói-mo, lèng と lêäng が、同じ単語の異形式であることを了解した上で、同じ一つの漢語を対応させたものと考えられる。しかし、必ずしもこのような了解をとまなうことなく、違つた Bê 語のいくつもの単語に、同じ一つの漢語がふりあてられている場合が少なくない。

p. 71 tóm cœur *s̄jim 心

p. 66 tiêm goûtér <H. tiêm *s̄jim 心

p. 66 sím, sím lú'ng cheviller <=T. cim <*cim 針

p. 68 tséâm <H. chiâm *c̄im 針

p. 72 sòm, sòm hêäng clou de girofle <*cim 針

p. 54 hêô kōk da hêô genou…… <*du 頭

p. 62	hau	“tête”	<*du	頭		
p. 63	haù	p’ò haù	“boutique”	<*du’	頭	
p. 65	hào	kua hào	“excessif”	<H. hào	<C. t’- *du	頭
p. 55	hêô	mạk hêô	“haricots”	<*du’	豆	
p. 55	hèô	mạk hèô	“arachide”	<*du	豆	
p. 64	dáo	dáo hu	“fromage de haricot”	<*du’	豆	
p. 66, 67	nèm	nèm kíng	“prier”	<*nem’	念	
p. 68	nêãm	nêãm tsón	“véracité”	<*nem’	念	

本書の原稿が、もともとフランス語・ペー語辞典として作られていたために、それをペー語・フランス語辞典に改めるならばペー語の変異形式の整理が当然必要になつてくる。はじめに書いたように編集者が iê-ê; uô-ô などと同じ単位として認めたのは、その整理の結果にはかならない。しかし、そのほかにも、上掲例のように、êa と e, êô と au, ts と s などの相通関係もなりたつことがわかつてきた。ところが、記録された形式にこのような重複があれば、いつもその中の一つが正しい形式であり、他は変異形式であると決めてかかるわけにはいかない。Haudricourt が u’o’-o’ と認めた例に、

k’ò’i monter à cheval <T. khi’-C.-C. guý’ <*gie 騎 (p. 42)

k’u’ò’i enfourcher à cheval <*gie 騎 (p. 43)

k’ò’i à cheval, à califourchon sur un cheval <*gie 騎 (p. 50)

があり、この三つの形式は同じ一つのペー語形式の変形であるように見える。しかし、これに対応する共通タイ語形には khi と khwi (Nung-tho 系言語) の両形式が認められるから、ペー語で k’ò’i と k’u’ò’i の両形が並存していても決して奇異とは云えない。同じ意味を表現する単語として2形式以上が記録される場合、その2形式は実際に並存するか、もしくは記録の誤りかのいずれかである。いま確め得ない言葉を対象とするときの困難は、ここにもある。

6. 第三章は、各韻類末につけた比較語彙を初頭音の性質によつて並べかえ、初頭音の対応関係を考察する。ここでは両唇音 b- を例としよう。Savina は b の発音について指摘していないが、Jeremiassen が b と v を弁別しているから、Savina が ?b と b を混同して書いているのではないだろうかといひ、つぎの対応例をあげる (ここでは2例のみあげる)。

1. 古い *p から来源した ?b

	Bê	Thai	Tchouang	Sek	Li(s)	Li(w-l)
“aller”	bó’i	pay	pay	pay	hêy	fey
“année”	bêi	pi	pi	pi	maw	paw

2. 古い pl から来源した ?b

“poisson”	bá	pla	pla > pya	pla	da tla	hla
-----------	----	-----	-----------	-----	--------	-----

“pointe” bói pla:y pla:y>pya:y pla:y mut

3. 古い labio-vélaire から来源した ?b.

“poil” bôn khon pwn pul hun ñon

“corne” bâu. khaw kaw kaw háw haw

これに対して、b- には疑わしい例しかない。ペー語には初頭音 p がいないから、漢語の p にはじまる借用語はすべて b に変る。

この b は、Jeremiassen が v であらわすように、おそらく弱い摩擦音であつたが、3つの来源をもっている。

1. Thai 語の ?b から来源する。

Bé Thai Tchouang Sek Li(s) Li(w-l)

“epaule” bêa ?ba’ ?ba’ va vâ va

“voler” bôn ?bin ?bin ?bwil bin pen

2. Thai 語の唇歯音 v, f から来源する。

“feu” bê²i vay vi>vey vi pêy, fey fey

“nuage” bà ‘fa ‘fuə>‘fu via vin

3. Hoclo 語の v にはじまる借用語は、Bé 語ですべて b になる。b- はまた labiovélaire w, hw から来源する。

Bé Thai Tchouang Sek Li(s) Li(w-l)

“jour” bôn wan ñon ñan vên vañ

“rotin” bói hwa:y kaw-hwa:y va:y

w- にはじまる漢語の借用語もやはりペー語で b になる。

ペー語の初頭音の性格のあらましは、この章の比較から理解できる。Ⅲ章の最後に Haudricourt は声調の対応関係を述べる。その記述にしたがつて図表にして示すと、つぎのような関係になる。

	1	2	3	4	5	6
Bé 語 声 調	平板型 (plan)	上昇型 (montant)	下降型 (descendant)	曲昇型 (interrogatif)	鈍昇型 (grave montant)	鈍低型 (grave bas)
古代語声調						
高 級	上昇型	平板型	×	×	入 声	×
低 級	×	×	上昇型	平板型	×	入 声

この関係を変遷的に書き改めるならば、つぎようになる。

	古代声調	Bé 語
平板型	高 級	上昇型
	低 級	曲昇型
上昇型	高 級	平板型
	低 級	下降型

入声 { 高級 鈍昇型
 { 低級 鈍低型

この図式で、古代声調の下降型の行方がわかっていない。Haudricourt は、古く下降型声調をもつタイ語と対応する単語は、対応法則をたてるほど数多くはなく、Savina が聞かなかつたかもしくはほかの声調と混同してしまつた声調が問題になるであろう、という。

7. 第IV章では、漢語起源の単語を除いて、純粹の Bê 語を意味範疇 (parties du corps, excrétiions, qualités, animaux, végétaux, famille, monde, habitat, temps, armes, agriculture, métier, actions, nombres) に分けて排列する。最後の index には、Index des caractères chinois, Index alphabétique des mots "Moyen Chinois" restitués, Index Thai commun, Index Tchouang-dioi, Index Sek, Index Mak, Index Sui, Index Tong, Index Li があつて、本書をよく活用できるようにしている。

8. 1957年に R. Shafer は *Quelque équations phonétique pour les langues Li d'Hainan* ¹¹⁾ を書き、既発表の黎方言に関する資料を使つた比較研究から、つぎの初頭子音を設定した。

k, k', g, g', ts, t, t', d, p, p', b, n, n, m, y, l, (nasal fixes), r, w, ?, f(?), s, h, f(?), ts(?), tl(?), pl p'r.

Shafer の比較研究は体系的な網羅的なものとは云えないけれども、乏しい資料をうまく利用した仕事であつた。たとえば、その中で、Shafer は重要な対応関係の存在を指摘している (p. 395-).

*n-		argent	bois	cheval			
C. (中央方言=本地)		kan ²	kùn	ká			
S. (南方方言=俸)		nên	nùn	nà			
*n-	six	long	rat	*m-	cinq	chien	porc
C.	tôm	táo	tiũ	C.	pã	pã	paũ
S.	nôm	nào	niù	S.	má	má	máu

初頭に鼻音をもつ南方俸方言が、共通タイ語形に近い形式をもっている。岑麒祥も「広東少数民族語言調査紀略」(国内少数民族語言文字の概況 北京1959) の中で、俸黎語と本地黎語の対応法則として同じ関係をあげている。(声調表記は略する)

				“犬”	“五”			“田”	“長”
Ha.	m-	ma	ma		Ha.	n-	na	na:u	
Ben.	p-	pa	pa		Ben.	t-	ta	ta:u	

そのほか、岑麒祥はさらにつぎの対応関係も指摘する。

		“天” “被”				“黎” “二”	
Ha.	p-	pa	pei		Ha.	?d-	?dai ?dou
Ben.	f-	fa	fai		Ben.	f	fai fau

Bè 語は、これに対して“argent” ngõn, “cheval” m-, “chien” má, “porc” mâú, “rizière” nêã, のように鼻音の系列に属し, “ciel” p’a, “deux” bu’õ’n のように p- ?d- の系列(?)であるが, 単語形式の分布は, かなり違っている。Haudricourt も気付いているが, 本地黎語に属する白沙方言は保守的な性格をもつていて, とくに韻母 -al が認められる点は, Sek 語と共通した特徴を示す。この -al は, Savina の(倅方言) -o’u’ に対応する。

	白沙	Savina(倅)		白沙	Savina(倅)
“9”	fa:l	: pò’u’	;	“祖母”	tfa:l : chò’u’
“輕”	kha:l	: kho’u’	;	“低矮”	tha:l : thò’u’
“近”	pla:l	: lò’u’	;	“回”	pa:l : mó’u’
“起身”	val:l	: ó’u’			

しかし, これに対応する Bè 語形式はまったくわからない。

Haudricourt がここで使っていない資料に, 「海南保亭黎語音位系統」(陳世民, 黄家教, 張永言)『學術論壇』北京 1958 がある。この論文には, 非常に限られた語彙のみが提供されているのであるが, 保亭黎語は白沙方言とはやや異つた形式を示していて, 両者の間につきのような対応関係が認められる(声調の表示は略す)。

	保亭	白沙		保亭	白沙		保亭	白沙
	t-	ʔ-		?d-	t-		-e:ŋ	-iaŋ
“魚”	tʃa	ʃa	“甜”	?de:ŋ	ti:aŋ	“羊”	ze:ŋ	ziaŋ
“好”	tʃen	ʃen	“怕”	?da	ta	“花”	tshe:ŋ	tʃhi:aŋ
	tʃh-	tʃh-		-an	-aŋ		-am	-om
“樹”	tʃhai	tʃhai	“湿”	pan	paŋ	“嘴巴”	pam	pom
“挑”	tʃha:p	tʃha:p	“日”	van	vaŋ			

これらに対する Bè 語の対応形式もまた規則的ではない。Bè 語の系統, Bè 語と Li 語との関係の追求は未だ残されている問題である。

9. Haudricourt の Bè 語の比較研究を通じて気付いた事柄を二, 三補つておきたい。Bè 語は Thai, Chuang, Sek に近い形をもち, Mak, Sui, Tong¹²⁾ とはかけ離れていることに多い。しかし, Mak, Sui, Tong 語の異形が Tibeto-Burman あるいは Lolo-Burmese 語形に, おそらく同源語ではないかと疑えるほど類似していることがある。

“serpent” Bè ngèa は, Thai ñu, Tch. ñuə>ñu, Sek ñuo に近いが, Mak rui, Sui vui, Tong zui とは離れている。しかし後者は, Tibetan sbrul, Bur-

mese mruy そのほかのロロ系言語の形式と通じる。黎語 *ža* は、漢語 蛇にあたる。

“rizière” Bê 語 *nêa* は Thai, Tch, Sek na, (Li na, 本地 ta) と同源語であるが, Mak ?ya', Sui ?ra', Tong ?ya' は, Lolo-Bur. 系の lay-ya に対応する。

“pailotte” Bê 語 *têa* は Thai, ga, Tch. ga, L(s) ha, L(w-l) ña と対応するかどうかは疑わしいけれども, Mak hya, Sui hya は Burmese phya に近い。

“chevaucher” Bê 語 *k'ò'i, k'u'ò'i* は, 上述のように, Thai khi', Tch. gwuy', Sek khoy と同源語であるが, Mak ze [see 24], Sui *dyi' [tsi 55] (p. 42) は, Tibetan *htshib-pa*, Bur. *tši²-se* に対応する。

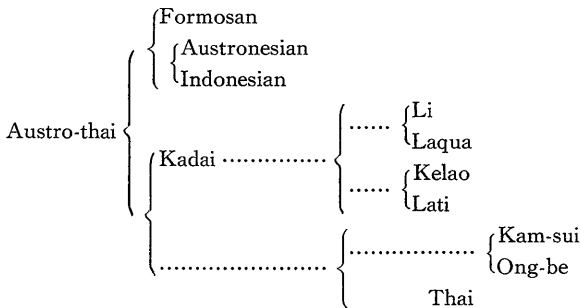
“Salive” Bê 語 *mâi* は Thai mla:y, Tch. mla:y, Sek mla:y, Li(s) la:y, Li(w-l) hluay にあたるが, Mak *ɬui* 13, Sui *ɣe* 11 は Lolo-Bur. *tuy (Bur. tam-tuy²) に対応する。

“nuit” Bê 語 *kiêm* は Thai cam', Tch. cam', と同源語であるが, Mak ?ñam', Sui ?ñam', Tong ñam' は Lolo-Bur. ña (Bur. ña) と対応する。

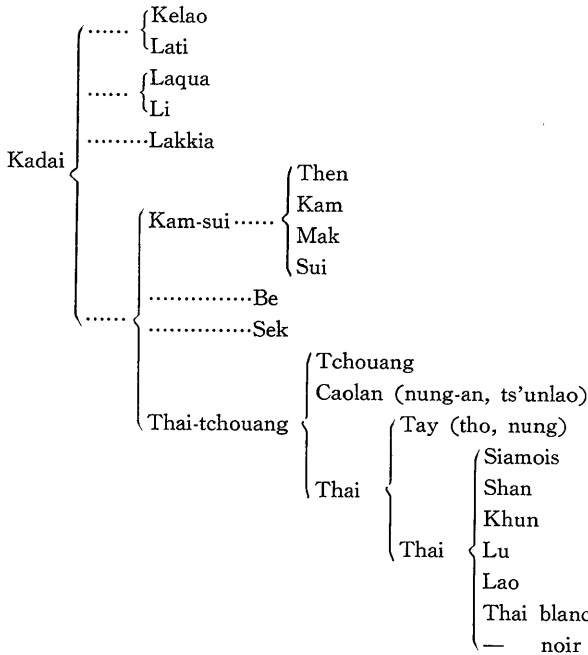
私は以前に「マック・スイ語と共通タイ語」(『言語研究』28号 1955) を書いたときには、この事実に気付かなかつたが、Mak, Sui-Tong (Kam) 語形の中に、チベット・ビルマ語形の形式が含まれている事実は、より広い範囲にわたる領域において、同源形式の分布を調べ、各言語の性格を総合的に考察し、波状図において言語間の関係をとらえていく将来の比較研究に、重要な希望を与えてくれる。タイ系言語の中に含まれる非タイ語的な異源語こそが、その言葉の性格を決めるためのすばらしい材料になるであろう。

10. 私は、東南アジア全域、そして雲南広西貴州、さらにその西辺地域チベットを含めて、あるいは漢語の方言をも包括して、全体として単語形式の分布を探求しなければ、この語族の Subgrouping は解決しないと思う。

Kadai 語の提唱者、Paul Benedict (もともと psychiatrist medical doctor) は、最近つぎのような系統図を提出した¹³⁾。



Haudricourt は、この中、Kadai とよばれるグループをとりあげ、つぎのよう
に発展させた¹⁴⁾。



この言語群を Kadai と総称するのは差支えないが、Kelao, Lati; Laqua, Li; Lakkia の親縁関係は証明されたとは思わない¹⁵⁾、Benedict が考えるように、この Bè 語を Kam-Sui 語と並べられる性格をもつ言葉であるとも断定できない。少くとも、Haudricourt の本書の研究を通じて証明された範囲内では、そのような結論にはいたらないと思う。いずれにしても、海南島の黎語と Bè 語の比較研究が、その問題に一つの解答を与えることになるであろう。その段階で、厄介な整理を経てまとめられたこの Bè 語の資料は、さらに活用されるに違いない。

Le Vocabulaire Bè de F. M. Savina, présenté par A. G. Haudricourt
Publications d'École Française d'Extrême-Orient Volume LVII,

École Française d'Extrême-Orient, Paris, 1965. pp. 1-170.

注

1) 本書14頁にある Carte des langues de la famille Thai はタイ語の分布領域を知るのに大へん便利である。この地図はやや修正されて、最近の論文 Haudricourt: La langue Lakkia (BSL. 1968) p. 168 に掲載されている。

- 2) Fang-Kuei Li: Notes on the T'en (Yanghuang) Language Part 1: Introduction and Phonology. 中央研究院歴史語言研究所集刊三十六本(紀念董作賓・董同龢兩先生論文集(下冊)) pp. 419-426 台北1966; Notes on the T'en or Yanghwang Language: Texts. 集刊三十七本台北1967. pp. 1-45, The Tai and the Kam-Sui languages, *Lingua* vol. 14. pp. 148-179. 1965.
- 3) Haudricourt: Note sur les dialectes de la région de Moncay, *BEFEO* 50. pp. 167-172, Remarques sur les initiales complexes de la langue sek *BSL* 58. 1963. pp. 156-163.
- 4) それまでに E. H. Parker が The Li aborigines of K'iung Shan. *China Review* 19. 1890. pp. 383-7. の中で若干の単語を発表したのと Carl C. Jeremiassen の “Loi aborigines of Hainan and their speech” *China Review* 20. 1893. pp. 296-305, の中で Limko (臨高) と Damchiu (儋州) の単語のリスト 2 つを提出したのがもつとも古い資料である。その後, H. Stübel の Die Li-stämme der Insel Hainan, Berlin. 1937 の中 P. Meriggi 執筆の Die Sprachen の章で, 多くの語彙対照表が載せられている。
- 5) Savina の著作にはここで紹介する Bè 語資料のほかにつきの 8 篇がある。いずれも大部の著作である。1939年に *Guide Linguistique de l'Indochine* を香港 (Mission Étrangères, Nazareth) で出版した。これは Savina の著作の集大成であり, Français Vietnamien-Tay-Yao-Miao-chinois cantonais-chinois hainanais-chinois pékinois の語彙が対照されている。その書物のはじめに著作解説がある (いまは本書 pp. 5-6 によつて紹介する)。
- i) *Dictionnaire Tay-Annamite-Français*. 1912年に Hanoi で出版された。Henri Maspéro はこの Tay 語を Tay blanc の俚語として利用したが, 実際には rivière claire と fleuve rouge の Tho の方言である。上掲の *Guide* の中で Savina はこれを Tho 語としている。ベトナムでは Tho 族の公の名称は Tay であり, Tay blanc と noir は公には Thai とよばれる。
- ii) Dict. Miao-Français これは Dict. Miao-tseu-Français として *BEFEO* XVI. 1916年に出版された。
- iii) *Histoire des Miao* 香港で1924年に出版されたが, そののち図版の多い再版が1930年に出ている。
- iv) *Dict. étymologique Français-Nung-Chinois* 1924年香港で出版された。Savina の著作の中でもつとも有用な辞書である。
- v) Dict. Français-Kim di mun これは Dict. Français-Man として *BEFEO* XXVI 1926年に発表された。
- vi) Dict. Hoclo-Français. EFEO の書庫に原稿のまま保管されている (N°

88), A-D, E-M, N-S, T-X. と index の 5 冊から成り, Index には, 上述の *Dict. Français-Nùng-Chinois* の Index がついていて, それに福老語がつけられている。Savina は上掲 *Guide* の中で, この資料を “chinois-hainanais” の欄に使っている。

vii) *Lexique Hiai-ao-Français* これは *BEFEO XXXI* に *Lexique Day-français* の題をつけて発表した。

6) 黎語の方言分類として信頼できる資料がなかつたが, 1956 年以後, 中国科学院は, 工作隊と海南黎族苗族自治州黎族苗族語文研究指導委員会を派遣して, 黎語の方言調査をした結果, 黎語の方言分類がはつきりして来た。黎族は約40万人, 大部分が南部の海南にある黎族苗族自治州にいる。科学院の調査団は, かなりの量の言語資料を集め, ラテン字母方式を設案し, 黎語をつぎの五方言と数種の土語に分類した。

i) 俸 (Ha) 方言, 羅活, 俸尖, 抱頭の 3 土語 (22万人)

ii) 杞 (ki) 方言, 通什, 陂対, 保城の 3 土語 (9万人)

iii) 本地 (Bendi) 方言, 白沙, 元門の 2 土語 (2万人)

iv) 美孚 (Me-fu) 方言, 東方県にいる (1万人)

v) 加茂方言, 保亭, 陵水両県にいる (2万人)

i) と ii), iii) と iv) はそれぞれ近く, この 4 方言と最後の方言は離れている。自称は *ɬai¹* といい, Savina はこれを Day と書き表わした。Ha 俸は [ha 11], 杞は [gɛi 11], 美孚は [moi 51 fəu 51], 本地は [zɯn 22] という。加茂は地名であつて, 自称は明らかではない。(歐陽覺亚, 郑貽青「黎語概況」『中国語文』1963 5期による)

7) Savina の Day 語の体系は 7 母音 i e a u' u o' o と 20 子音 p ph b p'(=f) v t th d k=c=ch, kh g gh x h s m n ng nh l から成つている。

8) Haudricourt は, この記述によると, 第 5 声調は *architonème* であるから, Bê 語には 4 声しかないという (p. 8)。

9) Pulleyblank: *The consonant system of old Chinese. Asia Major IX.*

10) この Mak 語 Sui 語形は, Fang-Kuei Li の上掲論文 *The Tai and Mak Sui languages* で補うことができる。たとえば p. 45. “salive” Mak *ɬui Sui ɣe* (cf. 拙稿『言語研究』28. 195 p. 49), Li, p. 166 (語彙番号 156); p. 47, “bol” Sui *tui 52 Li*. p. 174 (語彙番号 249); p. 91 “fumée” Sui *kwän Li*, p. 166 (語彙番号 133) etc.

11) *Rocznik Orientalistyczny Tom XXI Warszawa 1957. pp. 387-408.*

12) Haudricourt の Tong は Kam とよばれる言葉と同じものである。

13) D. K. Benedict, *Austro-thai. Behavior Science notes*, 1, 4 p. 227-261 (1966) (未見)。Haudricourt 上掲論文 *La langue Lakkia*. p. 182 による。

14) 上掲 *La Langue lakkia*. p. 182.

15) 私は Benedict の Kadai 語には反対の立場をとるけれども、ここではあえて Kadai グループに及ぶ問題をとり上げなかつた。それは Benedict の最近の研究の出版をまつて、批判の対象としたいと考えるからである (P. K. Benedict 教授は、1969年に *Austro-Tai on relations between Austroasiatic, Austronesian, Tai languages* を出版される予定である。J. Rahder 教授の教示による)。

批評と紹介

西田